

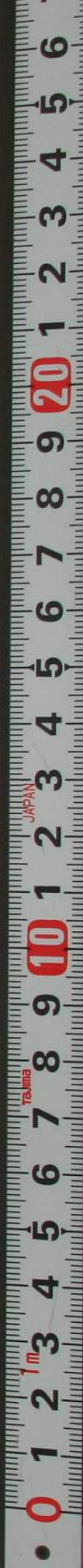


関ヶ原軍記

二編十三

十四

遠13
2207
22



門へ遠 13
 話 2207
 卷 22

牛本
 池清

関ヶ原軍記武編卷之拾二

目録

- 一 関東勢清洲を立て攻身（押寄）の事
- 一 并尾田村の百姓木願主一押と物（度）の事
- 一 百姓者一押が川渡りの案内者少の事

翻 譚 書
 倭 軍 書
 唐 軍 書
 隨 筆 物
 國々名所
 近世戦争書類
 右々外數品は座比宮中曉々程奉忍也
 繪 本
 書 本
 滑稽物
 曲亭馬琴之作
 其外諸先生作
 軍書
 敵討
 諸家騷動
 御捌物

書物演進所

東京牛込細工町
 誠堂 池田房清吉

并国东惣一同川と渡を事

牛本
池清



国ヶ原軍記或篇卷之拾三

国东惣清洲と立て波舟（押舟）の夏
并是田村の百姓原領主一柳盛物と
柳けんとの事

去はるる年波舟中納言秀信と
天守よりて款の初静と足後
さるるふ池田三右衛門尉輝政

軍令^{かき}越^こえ^らる^る率^す一^して押^お詰^づり
この時^{とき}國^{くに}東^{とう}勢^{せい}の清^{きよ}淵^{えん}を志^ま陣^{ぢん}
追^お手^て搦^な手^て一^し押^お向^むか^ふ大^お手^て此^こ方^{かた}
を福^ふ崎^{さき}正^{せい}則^{のり} 如^{ごと}及^及嘉^か明^{めい} 細^こ川^{がわ}
忠^{ちゆう}貞^{ぢん} 尾^お田^た長^{ちやう}政^{せい} 田^{でん}中^{ちゆう}吉^{きち}政^{せい}之^の
外^{ほか}尚^{なほ}井^い 系^{けい}極^{ごく}御^ご軍^{ぐん}代^{だい}々^々井^い伴^{ばん}
直^{ちゆう}政^{せい}又^{また}及^及堂^{たう}々^々虎^こを別^{べつ}して

内^{うち}府^ふ公^{こう}の所^{ところ}内^{うち}迄^{いた}あつ^く軍^{ぐん}
此^こ越^こえ^らる^る直^{ちゆう}政^{せい}の如^{ごと}法^{ぽう}相^{さう}々^々あり
このせり追^お手^て此^こ軍^{ぐん}を及^及る^る物^{もの}矣^や
濃^{のう}より也^やる^る又^{また}派^{はい}田^た々^々る^るゆ^ゆ人^{ひと}
新^{あらた}々^々年^{ねん}亦^{また}幾^{いく}々^々と^とり^り御^ご方^{かた}々^々ゆ^ゆ
尾^お城^{じやう}と海^{うみ}りて野^の加^か洞^{どう}と破^{やぶ}年^{ねん}
此^こあ^あの^のぶ^ぶに^に御^ごつ^つあ^あ々^々々^々の^の
定^{さだ}め^める^るり^り又^{また}々^々々^々々^々々^々手^てを^を池^い田^た

輝政 浅野幸長 輝直賀至
鎮 山田一豊 堀尾信濃守生
駒瀨崎守る びり 松下 吉次
有馬 松倉 遠藤 山下 木曾 川乃
弓下りに抑むらひし びり び先
狼狽としく 名法へ 子旨との
時多 追平 搦手 しく 一時 攻
るる あり あり しく 攻
るる あり あり しく 攻

をとる 双方一不子 軍勢 攻
おし びり び先 しく 攻
るる あり あり しく 攻
とる びり び先 しく 攻
とる びり び先 しく 攻
とる びり び先 しく 攻
とる びり び先 しく 攻
とる びり び先 しく 攻
とる びり び先 しく 攻

勢三子余人あり知州のこの
時併ふ此國宇都宮の城より
して八百石城を

東恩交ま人の多事申すも
この多虎を源部
名一石さる事一其甚由結
ある事ゆりまゝの別人
播く事あつく不忠候

の曾士あり今度この實ケ
系合親り新く軍功有
一大将あり壯年此時
の多族り生れ江別在
村の百姓の子あり娘あり
阿軍法師に奉公一後
千破也丹波者一仕一その
後大和入納言者出仕一

彼中の國冠山の合戦
軍功有る二百石も放る
その故秀長は免後平の
高野山よりふりて隠逃
——城古太岡野下——
の山く七百石とあり
新解として大功と立
其名高く久しく浪人

——て續く——
——戦う山の及く二丈ほど
良好く中々無双の働き
ありたるや年々そのうち
とそいをおおし形有る
をりのちありさんばこの
とびに敵に戦うひ又九月
十又日よの合戦

いづき年軍功有るや

新嘉慶長又年八月廿一日冥
命此池田輝政が一黨三百余人
江波の口よりよおつて川
此根子と伺ぐひらるに木曾川
乃橋も強くして測測の續
知も強くあるん

て橋も切らるるも川橋廣く
此とらるるも是田の渡りといふ
波年勢もむらむらつて
さくとも結也して武千六百餘
人銃炮越るるべし待飛り
すこのそのうらわ江波むら
編慶堂より秀信のまゝの家
也又武吉守ありて勢ひ

つゝ 増らふの故年代高し山
聲こゑつゝ 中々さうむとまなり
さぬるり 池田輝政 清隆きよたか長
増ま源げん頼より朝あさ生なま約やく 金かね表ひょう一いつ柳りゅう
遠とほ夏なつ 本もと多おほ志し務むあまの
川か駕が手て おお通とほぶぶととりりくく 在あ河かを
り 海うみへへ 子こ 漸やるるりり 中なと 増まるるく
見み合あせせ 案あん内ない者ものを 求もとめめて 先ま陳ちん

まへまへ一いつ町まち余あまりり志しりりぞぞいて
籠かご城じやう立たちちりり 後あも 尾お田たむむと
戸と田たむむと 又また 百ひゃく石いしののままりり
を 入いりり 出でるる 一いつ 柳りゅう 監けん物ぶつが
傾かたむかかるるりりのの 祈いのれれ 百ひゃく姓せいども
つつのの 一いつ 牽けん度たのの 慈じ悲ひ地ち 慕も
ひ 今いまのの せせりり 村むら中なか 寄よりり 合あて
南なん不ふ乃の 地ち 街まち 一いつ 柳りゅう どの 日ひ 頃ころ の

恩澤^{おんたく}を分^まちりて流^{なが}れた小^せ川^{がわ}も
くこの寺^{てら}に此^{こゝ}に居^ゐる者^{もの}も
あれは日^ひをくくこの^{こゝ}に^にび^びの^の業^{わざ}内^{うち}
して此^{こゝ}川^{がわ}の寺^{てら}青^{あお}鞆^{たもと}とさせ中^{なか}
冥^{みやう}東^{とう}北^{ほく}流^{りゅう}如^に懸^{けん}流^{りゅう}りて武^ぶ名^な
の^のを^をま^まの^の人^{ひと}松^{まつ}平^{へい}とせ^せと^と東^{とう}之^の
又^{また}は川^{がわ}を^をく^く又^{また}六^む松^{しょう}人^{ひと}も
る^るく^くんで越^こえ^える^る行^{ぎやう}程^{ぢやう}の^の事^{こと}

う^うま^まべ^べさ^さる^るり日^ひ頃^{ころ}川^{がわ}の^の業^{わざ}内^{うち}
の^の知^ちり^りて^て建^{けん}儀^ぎに^に百^{ひゃく}姓^{せい}ども
又^{また}六^む松^{しょう}人^{ひと}川^{がわ}系^{けい}へ^へ出^でて^てり^りる^る也^{なり}

百姓^{ひやくしやう}を^を一^{いつ}帯^{たい}笠^{がさ}物^{もの}が^が川^{がわ}渡^{わた}り^りの^の業^{わざ}内^{うち}
者^{もの}と^と知^ちる^る事^{こと}

并^{なら}冥^{みやう}東^{とう}北^{ほく}流^{りゅう}一同^{いつどう}川^{がわ}を^を渡^{わた}り^りて
日^ひく^く新^{しん}く^く同^{どう}東^{とう}の^の大^{だい}軍^{ぐん}川^{がわ}端^{はた}く

立並ぶとさうして一柳監物
先陣より渡り戦をすまひ堀尾
信澄も池田彼中にお續き
川をさしてしてさきよむ
破年がその軍兵は新骨城より
つて扱みさうしてさうして
終身お負く入城をすまひ
と戦を討つるべしと退ひ

く若原を城中にすまひ新軍
評定あつて鈴城の手にさうして
らんあり退手此方の奇手福崎
正則以下行ヶ鼻と攻めたり押
向ひて戦ひを交へり

兵書に曰く功を立るは此
職せん孝とさうして子乃職
今死を戦場よりして死に去

士は徹きりぎりなりその三つは者
をばしる人あり人乃事
ふちらべさるゆゑあり
人として善と學問をせむ
をしと名くた建るに習る
は存まもり出だす凡そ友をた
己おのをく増ます老を求むべし
氣を同じふ人よの出だ合あはる

かろしとあるごとくとら角
能よ身人み子こ弟てい合あは時ときをを隨まは
音ね信しんりして是こ見みはけ
目めにそそそある友とも達た来きり
しと一ひと口くちく是こ見みされ一ひと身み
されを知しるぬ也や此こ中ちゆう秋あき心
よ名なが徳とく子こ信しんりして徳とく
なり明あ白はくの命いのちを知しるぬを

おしやんくをりく思りて
まゝ一年のさうりさりき
え日えんぶちありさりてあれ
え日斗りに限るん春の
うち永ながあささうりてお
けく安楽あんらく月さるるに
き年此所の勤め或ひも
そのうに極りたる法用ほつよう

才一さいいつ南年なんねんも国月こくげつをり
例年れいねんその遠とほひく業わざさるる
るゆり結く武家ぶけさるる
いりて部べのうり部べて
日本にっぽん函中ほんちゆう此田畑こゝのたはたく限りあり
国月こくげつ二十四にじゅうよっぴ不足ふそくさるるあり
物ものとて部べのうり部べを
身みと収おさむるは才一さいいつりり人ひとの

居る人の子たるの孝
地立る心根の根えあり
必し居る所の所れあり
也代君父子孝地懐ふ元来
忠孝まへて居る子あり
志るに少く此孝公して
大功を立れば主人は忠
忠まへのところある故に

功名をばそれ我中し
若く忠を以て心を働か
若く居れば徳があらん
主人に懐くべきの利あり
そのころあつて必しに録
聖者がいふ人子あり
孝もあつて父も元あり
孝りてまへてその利後世

子父母の名は冠する事と孝
の終り也といふは冠角高名
其名は冠する事は是れは
と折る時を父母より不足
あるりのあらう事なり
今此子とていふ親のあり
後りの是れとていふ事
きつる事父母の心を

夫天情他人子の者なり
為人鬼も角あり父母
孝君と忠臣をつくりて
その功ありてはぬれ
是れ一物として他人を
秋はるののありと
揚毎子自強し事
くろの者くはる事

糸子のしびれうらみ
双宵の義骨討死を御身ホ
振群ありこれ御一平免を
鉄場平吉の武士の職之と
いふ徳のごとく修り免を
かくりまんやごごく武
門の義一信あり世平
り鉄場平吉をとりけく

をうらみしひれうらみ
知れ高録鉄骨む存也
いふをりつての御あり徳云
あり知れとまへを為とて
強くをうらみしひれうらみ
あはれ御身を御身とる
是乃高代治平の御身と
はあ遠しうらみ今あり

劫世^{えんせ}千^ちあり^りば人^{ひと}ご^ごあり^り
死^しを^を何^{なに}とも^{とも}名^な目^め人^{ひと}お^お務^む
ま^まく^く御^ごく^く又^{また}ま^まり^り軍^{かみ}中^{ちゆう}
よ^よの^の死^しを^を極^{ごく}ん^んト^トて^てお^お御^ご
く^くその^{その}内^{うち}千^ち強^{かち}弱^{じやく}あり

初^{はつ}く^く破^は年^{ねん}中^{ちゆう}洞^{どう}云^い秀^{しゆ}信^{しん}の^の體^{たい}
布^ふの^の江^{かう}海^{かい}む^むく^く此^{こゝ}編^{へん}慶^{けい}堂^{だう}く^く建^{けん}
く^く先^{せん}陣^{じん}を^を本^{ほん}送^{そう}大^{だい}集^{しゆ}の^の修^{しゆ}百^{ひやく}交^{かう}

執^{しやく}あ^あき^きお^おその^{その}節^{せつ}此^{こゝ}せん^{せん}く^くも
楯^{たて}地^ぢあり^りく^くく^く傳^{でん}播^はく^く寺^{てら}あり^り
この^{この}時^{とき}是^{こゝ}田^{でん}村^{むら}の^の百^{ひやく}姓^{せい}民^{みん}の^の願^{ねん}主^{しゆ}
一^{いつ}柳^{りゆう}監^{かん}物^{ぶつ}を^を先^{せん}陣^{じん}に^にせ^せく^く武^ぶ
名^なを^を形^{かたち}り^りと^とせ^せ大^{だい}名^なく^くせ^せを^をや
と^と年^{ねん}あり^り故^{こゝ}ら^ら百^{ひやく}姓^{せい}民^{みん}を^をめ^めお^お指^{さし}
人^{ひと}を^をさ^さご^ごり^りお^おる^るの^のく^く實^{じつ}を^を東^{とう}
勢^{せい}が^が二^に万^{まん}余^よ人^{にん}の^の中^{ちゆう}と^と一^{いつ}奔^{ほん}反^{はん}

や^あの^まま^まと^ま置^ま物^まど^まの^まの^ま居^まあ^ま
う^まと^まお^ま尋^まね^まり^まる^まお^ま申^ま意^ま乃^まを^ま
と^ま足^ま身^まく^ま大^まき^ま年^まし^まも^ま所^まろ^まび
百^ま姓^ま乃^まの^ま馬^まの^ま前^まく^ま臨^ま張^まして
月^まご^まろ^まの^ま日^まご^まろ^まの^ま此^まの^ま意^ま怒^ま張^ま既^まく
只^ま今^ま報^まし^まき^まの^まい^まや^ま海^ま
せ^まと^まぬ^まく^まも^ま色^まく^まく^まも^ま漸^まぶ^ま
法^まう^まま^まつ^まる^まべ^まし^まと^ま川^ま系^ま張^まら^まち

の^まぞ^まむ^まし^ま一^ま柙^ま置^ま物^まも^ま夷^ま羅^ま奴^ま
恙^ま武者^ま者^ま之^ま外^まの^ま飛^ま織^まし^ま此^ま
よ^ま所^まの^ま同^まし^ま毛^ま結^まら^まぐ^まと^ま張^ま
裁^ま身^ま意^ま乃^ま馬^まの^ま七^ま寸^まを^まろ^まん
と^ま見^まゆ^まら^まに^まら^まる^まあ^まの^ま此^ま押^まを^ま
と^まう^まけ^まく^ま板^まあ^まら^まり^まの^まま^ま記^ま
あ^まの^ま宗^ま配^まも^ま拘^ま乃^まの^まん^まより^まけ^ま
地^ま川^ま乃^ま先^ま陣^まも^ま一^ま奔^ま置^ま物^ま之^まと

名のり送毫浪水玉をよきて
参りいんごりを長大塚権を夫
下知して主人を帰るる
三拾余騎くつり法くとも
べくお入色くり雑兵武百余
人も同く相續く軍田村
の百姓をの柳がるの口と
其外を看る者も扱く流る

海りく執んと浪垢尾信濃書
これを見く一奔も葉内者有
て浪もそやめんくおくる
るとも八百人もくく川
をよすお参るくお参んで
海り執ると浪安ふ池田輝政
の合身同首備中もさ士卒よ
難きくく一人細織りの

鑑かん心しんとと意い一いち金かね見みをを棟むね梁りやうををねねば
一いち身みにに御ご衣いをを遠えん意い河かりり家け人にん
たの中なか一いちくくあありりんん西せいくくのの
家けもも續つづけけとと同どうぐぐくく川かわへへ赤せき
入いるるくくりり是こゝふふくくくく境かき地ぢ左さ
系けいちち支し音おん長ちやう山やま内うち對たいするる者もの一いち豊とよ
みみるる松まつ下したおおとと始はじめめととくくくく
見みんん者もの一いちとと二に万まん余よ人にん追おひてて

川かわへへ赤せき入いるる後のちりりくくりりのの時とき
池いけ田でん輝き政せいををななすすくくふふ下したにに漸ぜんとと見み
つつくくるる心こゝろにに淡たん漸ぜん之の中なかをを考かんがへへくくくくちち
海うみををななすすくくるる心こゝろにに大おほい海うみののああららまま
もも滑なめりりふふみみのの浪なみもも逆さかららししめめ
流ながるるがが如ごとくく冥みやう赤せき野のををななすすくくくく後のち
れれどどくくくくくくくくくくくくくく川かわののああららまま
もも見みんんががららおおびびくくくくくく之の

池清

関ヶ原軍記二編卷の十二終
池清

池清
関ヶ原軍記武編卷之拾四

目録

- 一新加納合戦の事
- 兼一押笠物骨戦の事
- 一池田俊中守御の事
- 兼波牟勢惣敗軍の事

池清

関ヶ原軍記武編卷之拾四

新田合戦の事

并一柳監物常秋の事

去後ごみ波岸勢の依及次第

每度齊文百段戦前事木造

左巻の依版派十左巻の目

小初平年びよ石田が加勢川

有るも女 梶原景時之妻の女
も三子余人とて侍り多し
申すも百交敵前守 木造左衛門
つ終の至双の露士として軍術
の達人なるゆへ士率よく下知
して軍勢の大家を志すも
馬ふの速者なりとて侍り
舞りての叶ふをうらむとて下

やど志さうりて小つてその前
相と接ひて申すも飛丸足輕
六百人川駕も多しとて敵を川
越す海りの時銃砲攻めあり
ておきする其初めの木造左衛門
乃と女將武者とて侍りくみ旅
騎寇二そとて武者とて
もちり多しとて川守近

見たりうりうり—そのともあふ
手負死人おむらぶ—依く
惣軍一牧桶状うつを連く—
の志うらむとあふけあぐ—押
海に流るとうらふよの海に
まゐれく—志先干—柳監物
の志武者乃の骨おとす川乃葉肉
ま百姓を干—瀬邊させ起る

款干—まき—毛根を干して
志一文字に押—見らん—と
志うり—と—志小路乃—柳
目毛搦—志危や—角—志
監物を向ふ乃—提—志
うり—志川の志—志一志監物
あり—志のり—志水—志
志ら—志—志一時—志二十余

福^と坡^まの^こ急^き越^あ揚^たく^く一文^{もん}孝^{こう}く^く
越^あち^ち入^いき^きこ^こり^り川^が端^はへ^へ越^こへ^へこ^こり^りは
其^そ越^こり^り最^まる^るあ^あこ^こり^りひ^ひゆ^ゆ急^き百^{ひゃく}度^ど
本^{ほん}遠^{えん}あ^あ人^{ひと}を^を急^きく^く心^{こころ}ぬ^ぬる^る度^ど
あ^あれ^れを^をこ^この^の所^{ところ}に^にど^ど志^しを^をこ^こり^りて^て越^こち^ちを^を
指^さく^くこ^こり^り待^{まち}を^をこ^こり^りは^は廊^{らう}足^{あし}越^こち^ち
た^たの^の家^か身^み合^あい^いさ^さん^んと^とこ^こり^りの^の内^{うち}は^は
堀^{ほり}尾^お越^こち^ち池^{いけ}田^{でん}越^こち^ち中^{なか}の^のあ^あ

勢^{せい}圍^いの^の声^{こゑ}と^と揚^ある^る者^{もの}六^む百^{ひゃく}余^{あまり}人^{にん}
の^の波^{なみ}身^みは^は是^{こゝ}恒^{こゝ}た^た川^が端^はの^の村^{むら}中^{なか}
崩^{くずれ}を^をこ^こり^り越^こち^ちあ^ある^るの^の飛^と越^こち^ちの^の武^ぶ
者^{もの}又^{また}指^さし^し難^{がた}な^な六^む百^{ひゃく}余^{あまり}人^{にん}に^にて^て
ま^まち^ちら^らう^うあ^ある^るこ^こり^り監^{けん}物^{ぶつ}下^か知^ちを^を
越^こち^ち入^いき^きこ^こり^り追^おひ^ひ越^こち^ちせ^せと^とる^るこ^こり^り
あ^ある^るせ^せの^の一^{いっ}人^{にん}槍^{やり}を^を一^{いっ}本^{ぽん}が^があ^あ
人^{ひと}大^{だい}掘^{ほり}越^こち^ち堀^{ほり}尾^おが^が衆^{しゆ}人^{にん}堤^{つと}

又所志事の友人一をんじをむ
百友が乞士のうち武士吾を傍
とつわりの子をんで錢を合
せ孫負運くるりりりりりり
又前田事友事つと提め所志
事つと友人ありごらごらご
く錢を合せけ提を孫成
折て倒さごりりりりりりり
遠さる

總伏せく首とつと武市長を
うけ来りて大塚を宴居さん
とつとつとつとつとつとつと
高甲と通つと提く孫と討り
りりりりりりりりりりりり
助け来りりりりりりりりり
もこのそつとつと討りりりり
波年守りりりりりりりりり

昔がーらとつとあーがらん方
よして武骨と震ひを急量平
大の千とあをれりーがらの
侘と見して南も敬うれ能き御
まことまらりのありと小山の如く
黒耀りとままく欠むり大塚の
六十才とあゆむを武老との芸
まろーも居をばして同とく

紙向の一柳監物これを見く
あれ大塚をくまれと下知
ろろふりー一帯が衆人を助
来る百交紙あまもくまて
若者大小初平と物けよと云
云禁の下りり前田中事
及田権と事つお紙隔つて
名又人と紙と合せたり

小大塚と版派をさし向ひ此
狩負るりし小勅平の義盛
子の名士ゆり槍を交す武市
兄弟と討えし大まき
つれゆりし小勅平ゆりし
ゆりしその版派小勅平大言に
実東勢に申し鬼神とん
大塚槍を交すは小勅平が討

名ゆりしその銃をたし実東勢
此大將をも討取しその
ば急ぎゆ大將乃実槍をさ
よとゆゆりしゆゆりし
岳井七多持子の名をゆりて
了す赤のり名ゆりし一押登
物これを見くゆりし歌の
振舞ゆゆ大塚が首とん

手敵より後より浦よりと七寸の
押髪此馬をあれよりして首
りせ一奔監物なりと追をる
壺井も夢申る知色めのりして
大おる部長退きせざるのり
るりとするといひて見たり
あつ監物を力量さひひ無双の
骨おるれば推余るり太刀を

おらざるばとて馬次強きせ
横抱手無子といひんよりし
がよりより所なきありともあ
く壺井がそと討く大塚が
首よえ掃くるよおのり身
指くしりりりりり敵七
八騎欠来りてえ圍むと太刀の
実上の切物なり心なるなりと

三騎を切く。落しを肉子
監物を六七箇所。子負ひらんば
既く討免ちり。是べ。子とてあつよ
衆人石思九き衆。一帯志物
山下十騎をうり。折をありて
自ら人。破着あけり。志ありぞく
監物。がこの時。あつて。さき
百丈。不南といふ。屋にあり。地

中り。先く。雑念。たの。漕。わら。ちり
懐。押。友。系。ち。又。音。去。三。子。余。騎
周。の。声。と。し。く。押。を。らん。を
く。む。り。ん。ま。や。り。り。ん。ん。ん。ん
た。百。度。破。前。書。木。造。た。集。つ。依
の。支。羽。ま。夜。竟。の。人。こ。ま。て
場。所。と。ば。門。を。陰。破。合。せ。く
お。御。く。志。り。り。ん。ん。一。柳。よ

操^{ひら}多^くの軍^{ぐん}乞^こた^たを^を河^か交^か路^ろ手^て
放^{はな}く^く見^みへ^へ千^ちり^り

池田^{いけだ}佐^さ中^{ちゆう}守^{しゆう}備^びま^まの^の中^{ちゆう}
并^な波^{なみ}阜^ふ勢^{せう}惣^{そう}效^{こう}軍^{ぐん}の^の中^{ちゆう}

叔^{しゆう}毛^{もう}子の^の部^ぶ服^{ふく}派^{はい}小^{せう}勅^{しやく}平^{へい}と^と
い^いり^りく^く深^{ふか}く^く款^{くわん}中^{ちゆう}と^と入^いり^り
お^お働^{はたら}く^く時^{とき}と^と向^{むか}ひ^ひの^の忌^いれ^れよ^よ

馬^ま川^{がわ}立^たく^く石^{いし}ら^らく^くの^の通^{ちゆう}を^をれ
大^{だい}乃^のと^と見^みく^くと^とり^りを^を形^{かたち}勢^{せう}の^の金^{かね}
小^{せう}札^{さつ}細^{さい}織^おの^の糸^{いと}ひ^ひと^と急^{いそ}
楸^{こう}形^{かたち}赤^{あか}と^とる^る兜^{かぶと}を^をい^いて^て記^き續^{つづ}く
乞^こ士^しと^とる^るけ^けれ^れど^ども^も英^ひ西^{せい}属^{じゆく}成^{なり}る^る有^あ
さ^さぬ^ぬと^とて^て兜^{かぶと}の^の建^た物^{ぶつ}を^を胡^こ博^{はく}の^の
二^に羽^は連^{れん}取^り金^{かね}を^を射^やり^りさ^さて^てら^ら
池^い田^{でん}佐^さ中^{ちゆう}の^のあ^あら^らん^んけ^けら^らび^び取^り

多く城の中へち産子せんと
おのひ御大おまゝのりこゝそい
とこゝを越へりたれば彼中ま
ゆるりたりとるふり下りて錢を
食さたりとるふり一衆人伴縁
ふき傍に来りて敵を志す
りのあり奴の集りにあつ
んとりて彼中も大いにお怒り

てそふも立退るしといひさぬお
双方とのり手利るまばらどん
下候しお合て掃負もいぬど
尺ごりーがいつが仕りけ
ん版泥を錢を交換して鹿
鹿をどつとけり彼中も
と陰を捨て走り寄り首被
討んとりり時版泥をころあ

ゆくりと欺がましきてて横抱よこだり
組くみんでよりまゝに値中ぢちゆうの幸さい
よのさぬで強勢がうせいの人と見えん
ざりしとて能よくたしるみ
あつり出時でじにそそ大カおほき知し
もよれぬく小劫せうせつ平へいが上うへ帯おびと
極ごくんでさしとむひのさぬ
授まからんよりしよ弓ゆみ杖つゑお七ななん

扱あつかわして伴いと縁よを傍かたりき
うけゆらひづもかたしう者
ありやと定まふと知しれんその
首討くびうちとよりしとり通とおるの
大御流おほみなが石いしの輝政てるまさの身み替か入い部ぶ
の子こやどむると威いと事こと利り
知しつととよりしと極ごく尾お尾お信のぶ流りゅうのさ
知し民たみ弱じやく左ひだり邊への池田いけだ所ところ左ひだり邊への

と先手とて武千余人お
来りてお殺しお破年がこの依
後方次第中日に武骨之と
したこの時の陣の布欠取さ
より依く撤ぐる籠る勢く
大い子さざめ死く敵軍は色
立より此時くく池田輝政の
惣軍と下知して三百余人平

知りにおしるく殺し
けり此時御軍代布多中務を
捕下知とつて款乞お敵軍は
いりてくく秀信の籠る
やで追おせしむみ殺し
やく百安敵あさる討死さる
く手懸とあつあさる
負軍と足切く木造左衛門佐

か値へりし季舟子のうらむ
今の叶ふをうらむはえ来軍の
まど目を知り玉らざる中洲
まど目のいふ形のごとく形て
の跡に記果をうらむ一は
時を執博も能くありき度
多未ぶ手勢を多し急ぶ
退きく大なる信々決練あり

後交れ執しむをいふみかんと
いふ左馬の依と弓矢印者よ
おも骨あり能くして志り
そくまていふそくはそく色
編一軍法の利を知るも急
ありこれよりつる軍公地
月まら木造多編魔堂乃
うらむの志りそく百交越あり

わりの領を一階にすべしと
下知しけるに城をたす作事
依りてあつて志りぞく
誠真事此敗小とありて
敵を目し隙多し大軍ありと大
崩れありて日れきたり
級軍より敵ありと見え
割るるなりとぞも其入るなりと

既平物級軍と成るべし
宮車幣より揚園地揚る
名は此麻討しその首級六百余
級也新加波城亦破り福波の
と名は此にて追強る至度城前
本造左衛門佐版沼十左衛門
津田左衛門同く度之麻あり
とびくは合せしお致し

由急友のみ急よる追ざりたり
は時大將秀信の籠本より物
見とて依々孫三郎嘉来り
く軍統次身と咄面けりそ死
嘉来りして是今味りの惣役軍
實東野の備へを却して追討
城法りまつる連をん出扉一鉄
仕ゆりか怪と孫利とていふ

千一秀信の籠奉行中嶋惣右
兼つ向く傳右衛門おこのせり
をこの本より居合せてり
りらの娘程嘉く御先陣仕家
をよるあり報あきる友兼の依も
定めて力とそくおとさ
中へまゐり侍籠中と出
とあくと御あけり小出隊人

赤星内膳より出て
城をめぐりて
有此尋大の平
とて都より中
了る実東野の
同玉りてや
とむひま
たしとま
る

程千似合ぬ人
よ警うん
新設階ぐ
さるん色を
く編魔堂
をども主人
ひり又ま
のまら

大將秀信志りぞ死ぬ事
叶りしものごとくきりり津田
之席と名武者之継威の
らうひと志し秀信乃馬
此節をいふあり百安本遠
の友人もこの所まで来りし
手をもつていづれよりこの
候よりいづれよりいづれより
一時

福波のいふ城あげく大返し
手もつて返りし我のいふと
めんといふまゝの園東野路時見
合はる内秀信を津田戻三
席介抱して入城を執る
友事の依も跡をいづつめて
やうく入城をいづれより
人手あむる軍兵共も今この

時と申りては湖に子三百余人
ありて余も皆武老と放て
既申その日毛言ふ事及むんとす
冥途勢今日内務利多十分
有り是れ勢名夜討やせん
と未だ井伴福島此支野も
来しはとて新加納乃新田橋
より二里ありそひく岩陣

撤責多明邦の刻とお定免
用ん度敷多病を以て
油清

冥途事軍記一篇巻の十四終
油清

